

## 五年余にわたる南方転戦

福岡県 大江 孝 祥

両親、小生、長男、長女、二男、二女、三男の八人家族。二男は満州に入隊、長女は嫁いでおり、二女、三男は生徒、児童であった。生計は父一人の肩にかかっていた。

旧制私立大学最初の繰り上げ卒業で、昭和十六（一九四一）年十一月二十五日卒業、翌二十六日、京都市上京区役所で徴兵検査、第二乙種合格。昭和十七年二月一日、久留米西部第四十八部隊入隊、幹部候補生は不合格、日出台の秋季演習等の訓練を終えて、昭和十八年一月八日、ガダルカナル島

で死闘を続けている福岡編成の歩兵第二百二十四連隊に転属の命あり、一月九日門司港より「三池丸」に乗船、長崎港、佐伯港に寄港、飛行機一機と弾薬を搭載して一月十一日出港する。

「三池丸」は貨客船で一二、〇〇〇トン、時速二十三ノットと速いので護衛艦も付かず独航した。途中バークレー海峡で米潜水艦の出現の報にジグザグ蛇行で、トラック島に寄港する。夜が明けると驚いたことに日本連合艦隊が停泊しており、当時はまだ帝国海軍の威力が感じられた。

一月二十三日ニューブリテン島ラバウルに入港。この千五百人の将兵は、門司港出港する時はガダルカナルに補充要員となる予定であったが、状況の急変によりラバウルに決したという。クローロン

という地で連隊の撤退、帰還を待つことになった。

クローロンでは先づ兵舎の建設が始まり、仮り中隊ごとにヤシの木を切り、ヤシの葉で屋根を葺いて兵舎を作り、ガ島よりの本隊の帰還を待った。補充要員は、三月中旬ガ島より帰還した本隊にそれぞれ各中隊に配属された。

小生は第三大隊第九中隊に入れられ、ガ島帰りの中隊長S中尉のもとで連日演習に明け暮れていた。隊長は将兵の戦闘における死傷をできるだけ少なくするための演習だと言っていた。

本来ならば昭和十七年七月、ガ島上陸以来激戦を戦い抜いた将兵には、内地復帰かジャワ・スマトラ島で警備等の任務が与えられてもよさそうに思われるが、なぜか連隊はこれを許さなかった。

昭和十八年五月十三日、ユゴボより「ハンブルグ丸」「ヒマラヤ丸」の貨物船に乗船、五月十五日パラオ港に寄港、五月二十三日比島マニラ寄港する。市街は日本の大手の銀行や有名商社が軒を並べてにぎわっていた。昼間は正午から三時まで午

睡の時間とあつて、商社も商店もシャッターを閉ざして休業、土地の住民は眠っている。

同年六月十五日、連隊はサイゴン（現ホーチミン）に上陸、新編成の第三十一師団（烈兵団）佐藤幸徳中将の隷下に入り、師団は我が歩兵百二十四連隊外歩兵五十八連隊（新潟高田）、歩兵百三十八連隊（奈良）その外特殊部隊を隷下にして編成された。

なおインパール「ウ号作戦」に向かう第十五軍（林）司令官は牟田口康也中将で、烈兵団のほか第三十三師団（弓）、第十五師団（祭）がその隷下にあつた。連隊の編成も大規模な変更が実施された。主として第一大隊は旧歩兵百二十四連隊第二、第三大隊は第十八師団当時の僚友連隊であつた歩兵第百十四（小倉）、歩兵第四十八連隊（久留米）、歩兵第五十五連隊（大村）から一個大隊を割譲して編成された。当第二百二十四連隊第一中隊は主として旧第一大隊、第二中隊は旧第二大隊、我が第三中隊は旧第三大隊の第九・第十・第十一の各中

隊のガ島の生き残りとクーロン補充員で編成された。

連隊は一週間サイゴンの兵站宿舎で休養したあと、ツドム飛行場の兵舎に移った。ここで新しい兵器が支給され、ここで行われたインド進攻作戦までの限られた期間内に達成させねばならなかった用兵の訓練は実践的で激しいものであった。一方では恵まれた食糧にあぶかり、将兵の戦力は充実したことがあった。

この間にガ島での岡連隊長以下戦死者の慰霊祭も実施され、英霊は九月六日、福岡に無言の帰還をした。

この間小生はアメンバー赤痢に罹り、一カ月程サイゴンのカチナ通りの当政庁街に有った女学校を接収して開設した陸軍病院隔離病棟に入院した。その後ツドムでの戦闘訓練を終了した連隊に、サイゴンからメコン河を遡航してカンボジアの首都プノンペン、ラオス、泰国バッターバンを越え、バンコクより泰面鉄道の起点ノンブラドックに着

く。この鉄道はまだ建設中なので歩いたり乗車したり、無蓋貨車に揺られ、機関車は石炭ではなく木材の燃料で走るので火の粉が飛んで軍衣を焼くこともあり、タンビサヤ・モールメンを経由、ペグーには十月中旬に到着した。

モールメンでは泰面鉄道の全面開通の式典が行われるのに出会った。南方総軍司令官山下奉文大將の参列、軍楽隊の演奏等もあり華々しく行われていた。戦後クワイ河マーチで有名になった。

ビルマ・ペグー到着後の昭和十八年四月、福岡第四十六部隊入隊のペグー補充員を受けて、炎天下のもと来るべき戦場に備えて猛訓練を行った。

そしてビルマの主都マンダレーを経てイラワジ河を渡り、サガインを過ぎ、ウントウ西北のピンレブ付近のチーク林の中に陣を設営して、糧秣、兵器、弾薬等の確保、整備、運搬手段としては牛・驢馬の訓練に当たり、中隊の一部は水路輸送隊となり、敵機の来襲を受けつつ、筏によりチンドイン河を利用しての物資の輸送に当たった。

昭和十九年二月二十三日、作戦行動開始、連隊

はバンモークに一部病弱者と部隊梱包を残置し、ホマリン付近に集結した。新しい軍衣、襦袢（肌衣）を着て軍装検査があり、出陣式における連隊長の訓辞がある。今でもその一部を覚えてい

る。「去る昭和十七年八月より十八年二月七日まで、当連隊はガ島で悪戦苦闘の末撤退のやむなき不運を喫したが、今度の作戦は第十五軍の充実した戦力であり、行軍力さえ強ければ勝算我にあり」と言うことで、大決戦に行く強い決意には思えなかつた。

昭和十九年三月十五日、チンドイン河を渡河、英印軍は日本軍の意図を察知し、河の上空に戦闘機を哨戒させ、人影を見ると銃弾の雨を降らせた。そのため昼間の海岸一帯は静寂そのもので、夜ともなれば渡河作業に当る工兵部隊の動きは激しく、同十五日夜半、連隊は師団の予備隊として、中心部隊に遅れること二日、全員渡河を完了し、二千メートルの山岳連なるアラカンの峻険に挑むこと

になった。

食糧三週間分、米一斗二升、粉ミソ、粉醤油、肌着等、特に戦闘に必要な小銃弾百二十発、手榴弾四発、十字鋏、円匙、鉄帽、防毒面を持つと優に四十キロを越える装備での行軍は言語に絶するものである。牛馬も力つき次々に倒れ、将兵の中にも体力消耗激しく落伍者も続出、なかにはその苦痛に耐えかね自殺者も出る始末、アラカンの山系を踏破すること約三週間余、チンドイン河より三百五十キロを超えたインド・アッサム平原に到着したのは四月上旬であった。

佐藤第三十一師団長の回想の中にも「アラカンの山岳地帯は実に想像に絶するもので、谷の標高千五百メートルで、登る斜面の頂きは三千メートルを超え、それがいくつも重なっている。もし事前にこれらの実相を知っていたならば、何ものも恐れざる勇猛心を持つ烈兵団長も、軍司令官にあつても、ある程度弱音を吐いたかもしれない」とある。

しかし詳しく知らなかったことと、とにかくやるといふ前提に立たされておき、ともかく一歩一歩切り開いて来たのであった。幸い山岳地域での敵の抵抗は予想に反して小規模で、先遣隊の歩兵第五十八連隊及び歩兵第二百二十八連隊の手で、四月六日未明には旧コヒマを占領した。

コヒマはベンガル鉄道の要衝で、デマプールからインパールに至る重要な補給路の中間拠点である。コヒマを占領することで英印軍のインパールへの補給路は我が兵団によって遮断され、この作戦で烈兵団に課せられた第一次の目的は達成されていた。

しかし旧コヒマを占領したものの新コヒマの防備は堅く、デマプール及びチエズエマ方面よりの敵援護部隊を遮断するため、我が連隊の一部をチズエマに急派し、歩兵第五十八連隊の主力をもって数次にわたる攻撃を敢行する。新コヒマも一時は陥落したかに見えたが、ジョンソマ高地の砲兵陣地よりの間断ない砲撃、次々に襲いかかる敵機

当初、第十五軍烈兵団は、二週間コヒマを制圧し得ればインパールの攻撃は成ると甘く目算していた。しかし二週間過ぎても四週間過ぎてもインパールの占領はできず、コヒマの戦線も膠着状態に陥ち入り、このようにして我が第三十一師団は弾薬もつき糧秣もなく、砲はあっても射つ弾はなく、毎日兵員の損傷は数十人に達し、また栄養失調により病魔に冒され戦列を離れて行くものが長蛇の列を作った。

その上これらの負傷者、患者を収容する野戦病院は有っても名ばかりで、薬もなく手当も出来ず、ただ寝ているだけである。

五月末になつては第一線配備の兵力は極度に低下し、師団の兵力は五分の一に当る二千数百人を割るに至った。コヒマ攻防六十余日、佐藤師団長は第十五軍に対し弾薬、食糧、病療物資の補給を要請するも音沙汰なく、それより師団の一部を割いてインパール方面へ向けようと命令した。

ここに至つて師団長の怒りは爆発、第十五軍司

の猛攻の前には歩兵第五十八連隊の果敢な攻撃も実らず、死傷者続出、師団は予備隊であつた我が歩兵第二百二十四連隊の第二、第三大隊を投入、第一大隊は急遽アラズラ高地付近に進出して陣地構築とコヒマ周辺及び山岳地帯の警備に当たつた。

五月下旬になるとアッサム地方は雨季に入る。

この地の雨量は世界でも有名で、掘った個人壕には水がたまり、栄養不足の体から山蛭に血を吸われ、水に濡れての戦闘は筆舌に尽くし難く、加えて食糧、弾薬の不足、マラリヤ、赤痢は戦闘以上に將兵を苦境に落し入れた。英印軍はコヒマの奪還を期して二個師団及び強大な空軍による昼夜の別なき反撃に移り、豊富な物量を言わせ、あらゆる火砲門を開いて我が陣地に集中攻撃を加え、多い時には一分間に百発以上も着弾した。そのためジャングルに覆われていた我が陣地は瞬時にして禿山はげやまに化する状況であつた。英印軍の補給はすべて輸送機により空からパラシュートで降下させていた。

令部及びビルマ方面軍司令部に次のような趣旨の電報を送つていた。

『師団はウクルルでも何等の補給をも受け得ず、参謀長（久野村）以下幕僚の能力は正に下士官以下なり。しかも第一線の状況については無知なり。従つて軍の作戦指導は支離滅裂、食うに糧なく、射つに弾なし、しかも戦力尽き果てた師団を、再び馳つてインパール攻略に向わしめんとする軍命令たるや全く驚くほかなし。師団は戦力を回復するため確実に受け得る地点に移動するに決す』

コヒマ撤退を決意し、師団將兵の全滅を救う決意を固め、昭和十九年六月三日、涙をのみコヒマ撤退の師団命令を発し、六月六日、師団は撤退を開始した。

コヒマ撤退に際し師団は、インパール攻撃に向かつて「祭」「弓」兵団の撤退を容易ならしむるためインパールまでの道路を確保する意味で、宮崎少将指揮のもと我が歩兵第二百二十四連隊第一大隊及び歩兵第五十八連隊の二個中隊、それに工兵隊

の一部約六百人を残した。

宮崎支隊長はアラズラ、ビスエマ、マオンソサニ、トエマ、マラム、カロン、ウクルルと逐次防衛の作戦を計画し、全滅を期しても三週間は英印軍の突進をくい止める決意をした。

この宮崎支隊のうち、後衛尖兵として最後まで踏み止まる任務を与えられた我が歩兵第二百二十四連隊第一大隊は、連隊でも数少ない「ガ島」生き残りの将兵を中心に編成されたものであった。その悪戦苦闘に耐え生きてきた一握りの将兵の上に英印軍の砲火は容赦なく集中した。

支隊の戦法は、一つの陣地で数日間徹底的に阻止し、いよいよ阻止できなくなれば夜陰ひそかに陣地を移動し、次の線で阻止する戦法であった。このころ小生は六人で斥候に出され、街道を越え間道の敵状偵察のため小隊を離れていたが、帰ると本隊は後退していなかった。アラズラ高地より最後のマラム陣地まで優勢な英印軍の猛攻を支えつつ数次の撤退のあと、昭和十九年六月二十日、

ラリア、アマーバ赤痢、脚気などが蔓延し、担架を担ぐ者、担がれる者、相次いで倒れた。

死者が出ればその上衣をはぎ、軍靴は破れば靴の上を布でぐるぐる巻いたり、あるいは裸足で辛うじて歩くという有様であった。とくに長期にわたる戦鬪にも一枚の衣服の補充も無く、肘、膝に当たる部分の袖や下衣はちぎれ、虱には悩まされ、かるうじてチンドイン河の渡河点シッター付近に到達するも、野戦病院は有っても医薬品も無く、それに加えて敵機甲部隊の急追、敵機の猛爆撃により付近は惨状を呈した。

このようにして宮崎支隊も含めて烈兵団がチンドイン河の東岸地区に集結を終わつたのは昭和十九年十月末のことであった。惨憺たる敗走五カ月、その間英印軍は急迫の手を緩めず、さらに雲南重慶軍の南下、フーコン溪谷よりは米中国軍の南進、カーサ地区の英印空挺部隊の跳梁、アキヤブ正面の英印軍の急迫等、ビルマ全域の戦局は危急最悪の状態となつた。

マラム付近の陣地で敵機甲部隊によってインパール街道を突破された。

この間、我が第三中隊の戦死者八十余人を数え、中隊の兵力は三十数人に減少、このあと私達斥候は中隊に復帰した。

コヒマ撤退後の烈兵団の行動は日本の戦史上まれに見る惨状を呈し、昼間は敵機甲部隊の急迫と空軍の銃爆撃にさらされ、夜間ひそかに泥濘の間道を戦傷病者を担架に乗せ、独歩患者は飯盒を手に杖を頼りに戦友に励まされ、かるうじて隊列を追い、健康なもので担架をかつがない者は中隊長以上という惨憺たる有様であった。

雨季に入ったアッサム地方は、大川は五月以降はことごとく濁流と化し、渡るに橋はなく、乗るに舟はなく、綱を対岸に渡し綱にすがって渡渉するが体力の劣えた戦傷病患者は相次いで濁流に吞まれると云う地獄図そのままの姿であった。それに加えて糧秣、医療品は底をつき、連日の雨にうたれての行軍では栄養失調者は続出、悪性のマ

この頃「盤作戦」担当する第十五軍「烈」「弓」「祭」師団はチンドイン河東岸に集結中であつたが、南方総軍の命によりビルマの主都マンダレーの線以南を確保することになり、昭和十九年九月下旬、折からの乾季・酷暑にさらされてイラワジ河南岸に戦略展開を終えた。その後十月二十六日、シエポにおいて我が歩兵第二百二十四連隊は山梨県甲府の歩兵第六十三部隊より将兵八百余人の補充を受けたものの一門の対戦車火炮も無く、戦車、地雷と肉弾攻撃によるほかなかつた。

昭和二十年一月月上旬、英印軍の有力な機甲部隊はチンドイン河ガズン付近より渡河、一挙にシエポ平原に進出せんとすの意図を察知した我が連隊は、これをシビイ山系に阻止する任務を帯び、遠く同山系の要地に進出した。敵は自動車四百両をもつ機甲部隊である。三日間にわたり頑強な敵を阻止、甚大な損害を与え、第十五軍の展開を容易ならしめた。この戦鬪において軍より感状を授与された。小生の属する第三中隊は、これより先サガエン

より急遽シエボ付近の警備を命ぜられたが、中隊の半数をアヤドウ付近の警備に割かれ、その上陣地構築に追われていた。一方では中隊主力はシエボ近郊のタベタ運河付近で優勢な敵の攻撃を受け、中隊長は狙撃弾により戦死した。(この地には昭和五十八年十一月中旬、小生の外三人で、中隊長戦死の場所に行き追悼式を行った)。

アヤドウにいた小生の属する第三中隊の第一小隊は、第二中隊と共に陣地構築の毎日を送っていた。そのうち伝令による命令があり、チンドイン河とイラワジ河の合流点モニワに進出、再びチンドイン河を渡河して弓兵団の一部の撤退援助に向かった。乾季で水の無い小川といつでも三十メートル程の川幅があり、渡った所で敵斥候と遭遇し、軽機関銃・擲弾筒・小銃の混戦となった。距離は近いが中間に灌木材があり、相手の影は見えないが射っている内に友軍にも一人の負傷者が出て、敵も発砲を止めて影を消した。負傷者は第二中隊員であった。

我が連隊は軍決戦の重点方面であるイラワジ河南岸地区に、約四十キロ間に連隊主力を分散配置して、敵の渡河南進を死守すること二十日間、この間広漠たるイラワジ平原を遮るものもない地形の中で、敵の猛爆、砲撃と酷暑と病魔に襲われ、我が連隊の損害は日々増大していった。

その後タンゴン、ジョー、キヤフセ、ニヤングイの各地で転戦するも部隊の死傷者続出、退路をミャン高原に求めて南下することになった。

昭和二十年三月下旬、日本の教育を受けビルマ独立の志をもって組織されたオンサン將軍の率いるビルマ防衛軍が、反乱以後あちらこちらで妨害を受けるようになった。モンバイ県ナンザンカンに露営している時、反乱軍の銃撃を受けた。このため小生はとりあえず高床式の空家に上って軽機関銃で応戦していると、H上等兵が自分にも射た射たれ腸が露出して戦死した。彼は佐賀県出身の召集兵であった。時は昭和二十年五月二日と記憶

その後、伝令により早々小隊に復帰せよとの命令があり、小隊全員三十キロ後方のイラワジ河を渡河して本隊の第三中隊の指揮下に入り、トラックで緊急輸送によりイラワジ河南岸に位置して、敵上陸の警戒に当たった。第一小隊の第一分隊の我々は分哨に出ると、先に分哨勤務をしていた分隊長は、交代する時交わした言葉が柳川弁だったので、部隊名や郷里を聞くと我が歩兵第百二十四連隊の乗馬小隊のS曹長であった。瀬高町の前田の人で下士志願で騎兵隊に入り、小生より一年上の人であった。

それより一時間後また第二中隊の分哨と交代したが、その後一時間もしないうちに、その分哨の正面に水陸両用の戦車を先頭にした敵が上陸して分哨は全滅した。

先に昭和二十二年三月頃復員されたS准尉は、小生宅にイラワジ河の分哨のことに触れて大江君は戦死されただろうと報告したと言っていた。という後日談があった。

しているが、わずか五分ぐらいの差で小生は死をまぬがれたことになる。

その露営地を去る時、小隊全員で野草の花をたむけて葬り、墓標として彼の小銃を逆さに立て、その上に鉄帽を載せて冥福を祈った。終戦二カ月半前のことであった。

その後、連隊本部と第三中隊は、一列縦列になり雨のモチ山系に分け入り、パプンへの百三十キロの道を急ぐことになった。この道も後続の部隊は白骨街道とか靖国街道と云って惨状を極めた所であった。

昭和二十年五月二十二日、モチ山系よりパプン經由マルタバン県ジンジャイ着、同地付近に展開し、サルウイン河の防衛作戦を準備中であった。モチ山系を越えるころから小生は左足膝の関節を痛め手製の松葉杖に縋がって歩いていたので、兵站病院より泰国バンコックの陸軍病院に後送になり、八月九日退院、ビルマ方面軍に送る日用品、雑貨等の輸送隊として編成された。

退院して原隊復帰の十人が一団となり、泰国ノ  
ンブラドックより出発、八月十四日ごろと思うが  
ビルマ・モールメン着、英印軍の空爆も銃撃もな  
いので不思議に思っていたが、英軍の偵察機から  
ビラが撒かれて日本の降伏を知らされた。

しかし原隊に復帰すると八月十五日、部隊全員  
が集合して大隊長より停戦協定が結ばれたことを  
知らされた。

八月二十四日、連隊旗を奉焼し、それより二週  
間後英印軍より武装解除となったが、それも日本  
軍の手によりジンジャイの部落の空地に部隊の兵  
器を置き、英印軍が引き取りに来るまでの一兩日  
は日本軍の手で監視させられた。

終戦の報が知らされると、部隊内では一時期で  
はあるが混乱が起きて、下士官以上は皆銃殺され  
るとか、部隊を再編して敢闘隊を組織してインド  
ネシア付近であくまで戦うのだといった流言蜚語  
が飛び交い、どうせ殺されるなら兵器をビルマ人  
に売り渡して、たらふく食べて飲んで死ぬんだと、

げます。

### 【解説】

体験記執筆者は、昭和十七年二月一日、久留米  
西部第四十八部隊入隊、昭和十八年一月八日、ガ  
ダルカナル島で死闘を続けている福岡編成の歩兵  
第二百二十四連隊に転属、門司港より「三池丸」に  
乗船、一月十一日出港する。

この歩兵第二百二十四連隊は第十八師団の隷下に  
あって、かの有名な杭州湾上陸作戦、バイアス湾  
上陸作戦などに参加後、広東地区の警備及び中国  
戦線を転戦した。昭和十六年十一月、第十八師団  
は編成替えとなり、歩兵第二百二十四連隊は第三十  
五旅団指揮下に入ったが、これによって第十八師  
団主力とは全く違った苛酷な運命に遭遇している。

以後、英領ボルネオ上陸作戦、セブ島攻略戦、  
ミンダナオ島攻略戦を転戦、昭和十七年八月、一  
木支隊壊滅後のガダルカナル島奪回に向かっている。  
飢餓と激戦と多大なる犠牲の攻防戦の後、昭

英印軍が来るまではそのような生活が続いた。し  
かしいつの間にか、それ等の噂話はなくなり、指  
揮系統を乱すこともなく、祖国への帰国の日を夢  
にインペリットでの碎石労務、ペヤジーでの英軍  
の雑役などに従事した。また、炭坑労務者は、モ  
ンキーポイントでの貨物倉庫での労役等にも従事  
した。

帰国直前にはイラワジ河口近くのアーロンキャ  
ンプに移り、抑留生活一年九カ月、昭和二十二年  
四月九日宇品に上陸、四月十二日自宅に帰った。

顧りみれば昭和十七年二月一日入隊、同十八年  
一月九日に門司出港以来、パラオ、ラバール、マ  
ニラ、サイゴン、カンボジア、タイ、ビルマ、イ  
ンパール作戦、イラワジ会戦等々、昭和二十二年  
四月の復員までの五年八カ月、若きよき時代のす  
べてを戦争に明け暮れて過ごした。

終わりに歩兵第二百二十四連隊建軍以来、幾多の  
戦闘において祖国のために戦没された幾多の将兵、  
戦友の御英霊に対し、深く感謝と御冥福を念じ上

和十八年二月にガ島撤退となり、そのままラバウ  
ルで再建後、サイゴンにおいて第三十一師団に編  
入された。

連隊は、ビルマ戦線では「ウ号作戦」に参加、  
盤作戦、イラワジ河畔会戦を経て、マルタバン湾  
岸防衛作戦中に終戦を迎えている。

体験記執筆者がガダルカナルにあつた歩兵第百  
二十四連隊の補充要員として乗船した「三池丸」  
は、ガダルカナル後の連隊再建のラバウルに入港、  
クーロンで撤退する連隊の帰還を待ち、三月、執  
筆者は第三大隊第九中隊に編入される。

こうして第三十一師団隷下でビルマ戦線に投入  
されることとなる。とくに昭和十九年三月十五日、  
チンドイン河を渡河、二千メートルの山岳連なる  
アラカンの峻険に挑むころの苦闘を次のように記  
している。

『食糧三週間分、米一斗二升、粉ミソ、粉醬油、  
肌着等、特に戦闘に必要な小銃弾百二十発、手榴  
弾四発、十字鋏、円匙、鉄帽、防毒面を持つと優

に四十キロを越える装備での行軍は言語に絶するものである。牛馬も力つき次々に倒れ、将兵の中にも体力消耗激しく落伍者も続出、なかにはその苦痛に耐えかね自殺者も出る始末、アラカンの山系を踏破すること約三週間余、チンドイン河より三百五十キロを超えたインド・アッサム平原に到着したのは四月上旬であった』と。

そして雨季に入ったアッサム平原では『掘った個人壕に水がたまり、栄養不足の体から山蛭に血を吸われ、水に濡れての戦闘は筆舌に尽くし難く、加えて食糧、弾薬の不足、マラリア、赤痢は戦闘以上に将兵を苦境に落とし入れた。英印軍はコヒマの奪還を期して二個師団及び強大な空軍による昼夜の別なき反撃に移り、豊富な物量に物を言わせ、あらゆる火砲門を開いて我が陣地に集中攻撃を加え、一分間に百発以上も着弾』。コヒマ撤退後の烈兵団の行動は日本の戦史上稀に見る惨状を呈した。昼間は敵の銃爆撃にさらされ、夜間ひそかに泥濘の間道を戦傷病者を担架に乗せ、独歩患者は

飯盒を手に杖を頼りに戦友に励まされ、かろうじて隊列を追うという惨憺を記録している。